

1<sup>st</sup> route, 2<sup>nd</sup> class.

Si no ya cu nija.

Totonilpro.

History -

1917

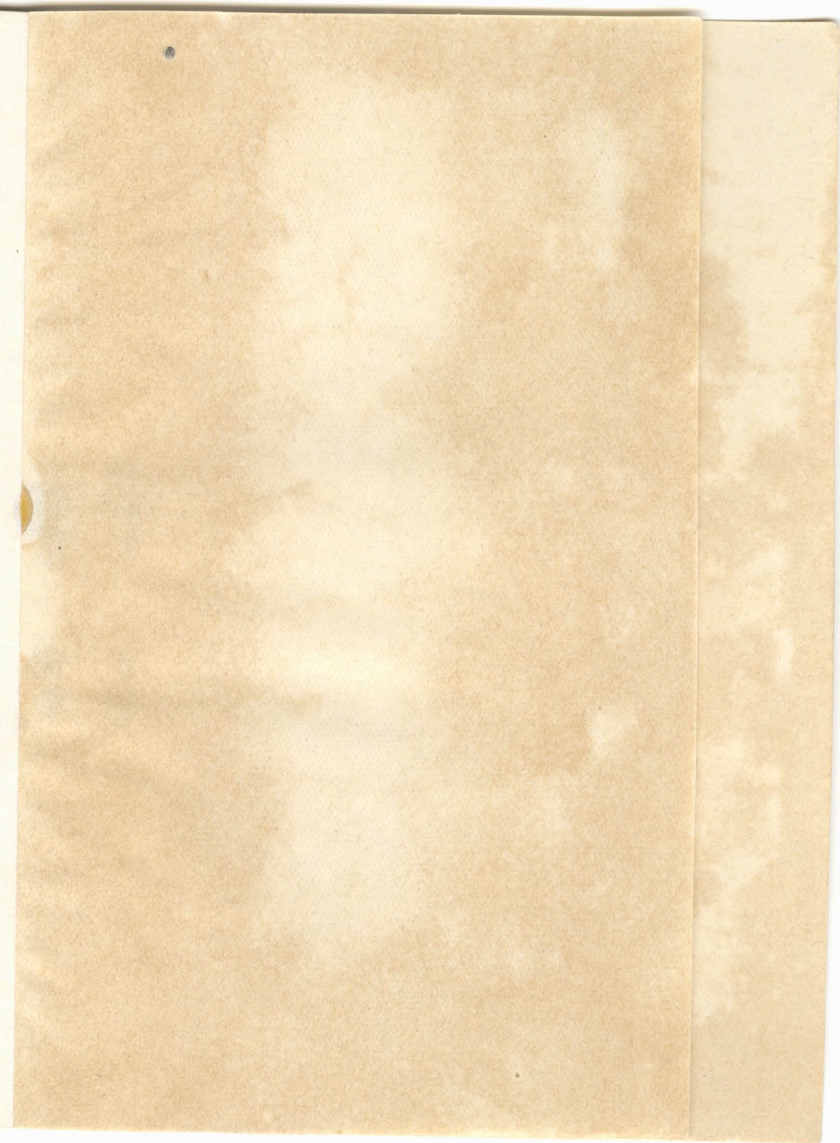
官幣中社井伊谷宮略記





官幣  
中社  
井伊  
谷宮  
略記

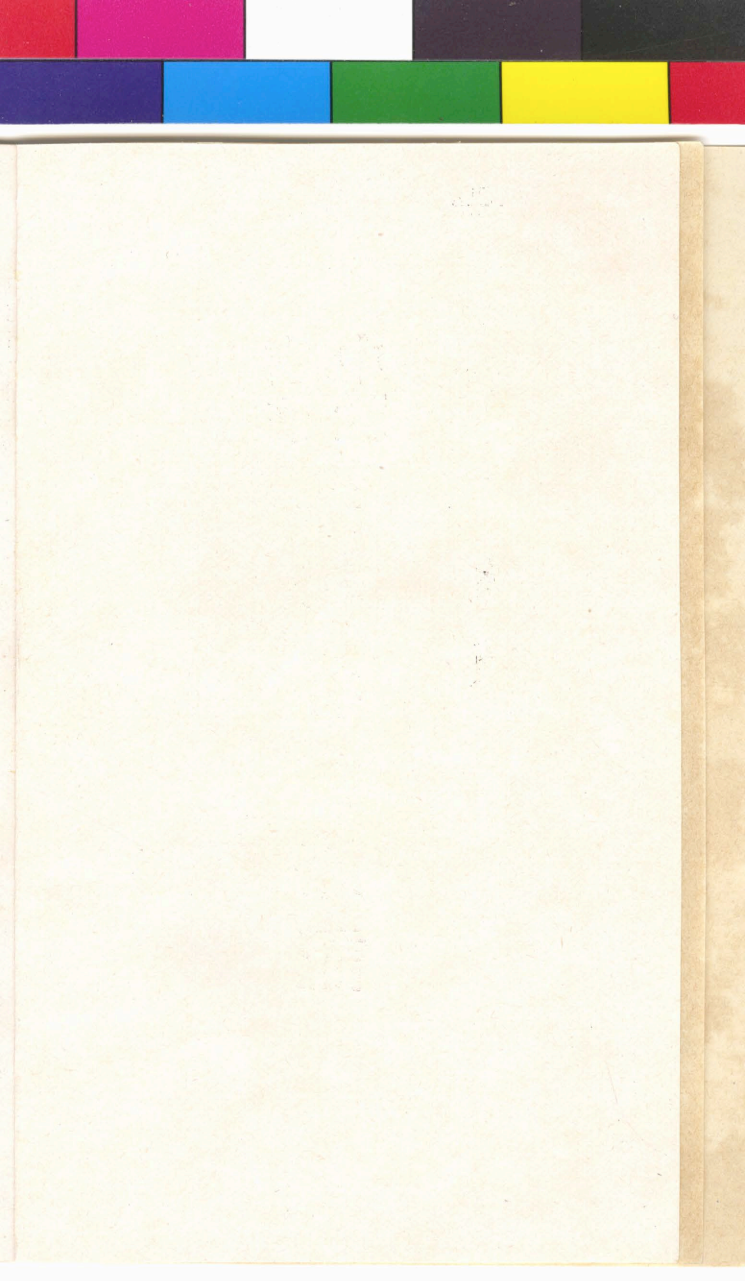






官幣  
中社

井伊谷宮略記



## はしがき

我國には、家に神棚、村に村社、郡に郷社、府縣には府縣社、國家には神宮及官國幣社あり。各我祖先、或は其祖先の特殊功勞者を祭りて朝夕尊崇す。輓近に至り、學校には神座を設け、武道及び農工商の團體、また各其道に功勳ありし祖先を祀りて景仰するに至る。要するに覺醒の機運に際會せる祥事なりとす。敬神の念は祖國の國民性にして、我帝國の國體、國是、道德、産業、其他百般皆この國民性より出發展開し來るものとす。願へ、我等が幼童の夜話、學家神棚の前に團欒して祖先の物語に打興ぜし時『汝力めて祖先の名聲を墜すことなかれ、此土此家、これ祖先の賜なり、あつげれ君國に盡して家名を發揚せよ』この父母長老の訓言、今猶耳朶に新にして片時も忘れ得ざるにあらずや。また願へ、郷校の師の語り給へる、天照大神の皇孫に賜ひし御勅、和氣清麿（護王神社）楠公父子（湊川神社、四條綴神社）等の忠孝史談の感想は今猶血湧き肉動くの興懷なからずや。我國運の興隆、忠孝も、仁義も、尙武も、勤儉も、皆これ祖先崇拜の根本觀念より簇生するに外ならず。



されば畏も 陛下は、賢所に神器、皇靈を親祭せられ、神宮及官幣社に幣饌を奉らせられ、以て國民に範を示させ給ふ。府縣郡村皆其旨を奉體せざるなし。

千早振神の社は月なれや詣るころのうちにうつらふ 中江藤樹

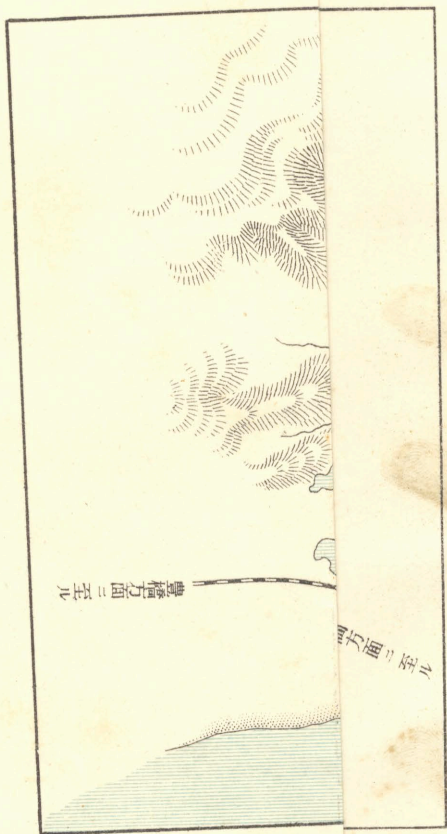
神徳を仰ぎて、心正しく、心正しくして四民和樂す。家運は神棚の前に萌芽し、國運は敬神の念に隨伴す。祭政歸一は國史の事實なり。

泰西文物の輸入せらるゝや、輕佻の子濫に彼國の皮想に眩惑して、甚だしく國民的自覺を傷け、今尙神社の神を宗教の神（例へば基督教、佛教、神道等の神の如し、神社は宗教にあらず）と混同して、或は尊敬を怠り、神官神職の官公吏なるを知らず、神前を過ぎて敬意を表せざるものなきにしもあらず。これ畢竟神社と祭神とを理解せざるに基く。憫むべく憂ふべき次第なり。

敬神は一人の私事にとどまらずして國家の大事なり。帝國國民の義務なり。神社に參拜せんとする者は先づ御祭神の事蹟を辨へ、衷心崇敬の念を以て神徳を仰ぐべきなり。獨自らするのみならず、汎く他に傳へ布かざるべからず。本記刊行の意全くこゝにあり。豈他あらんや。豈他あらんや。一言以て序に代ふ。

明治四十四年六月二十八日

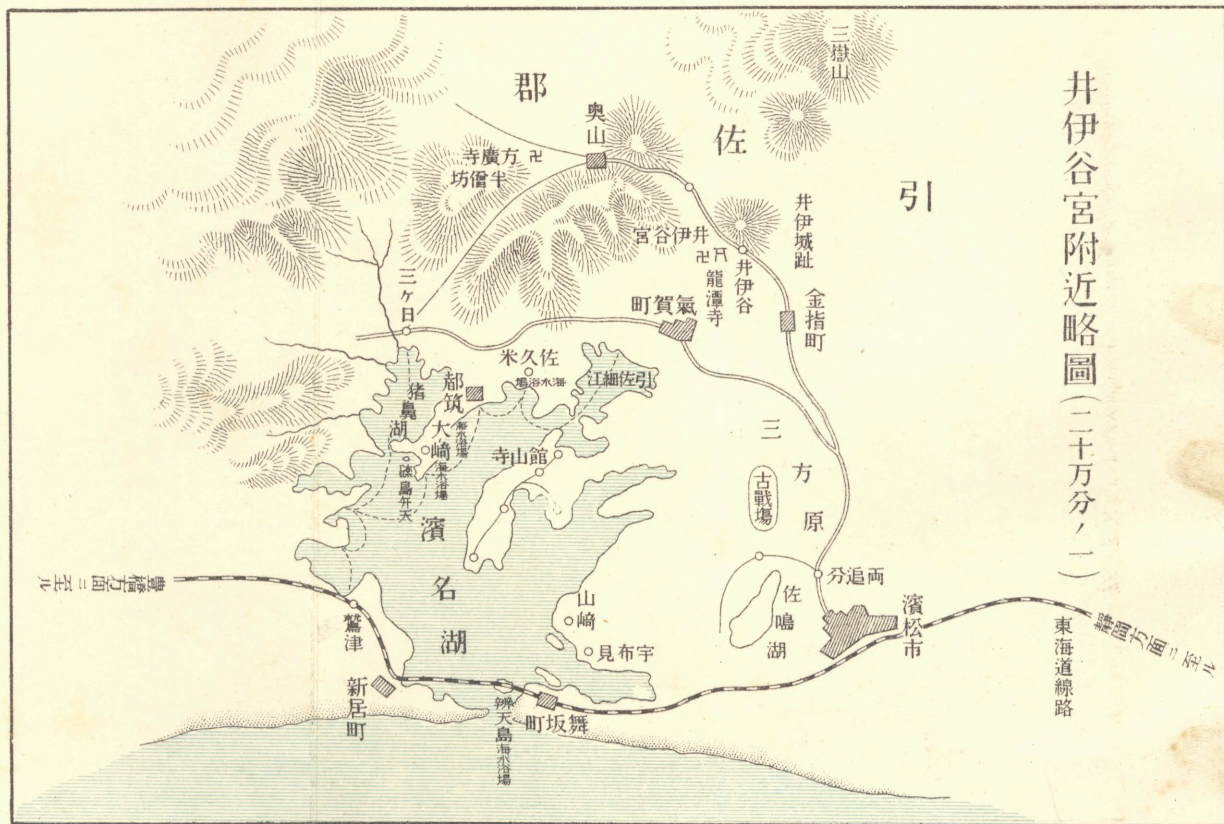
著者 識



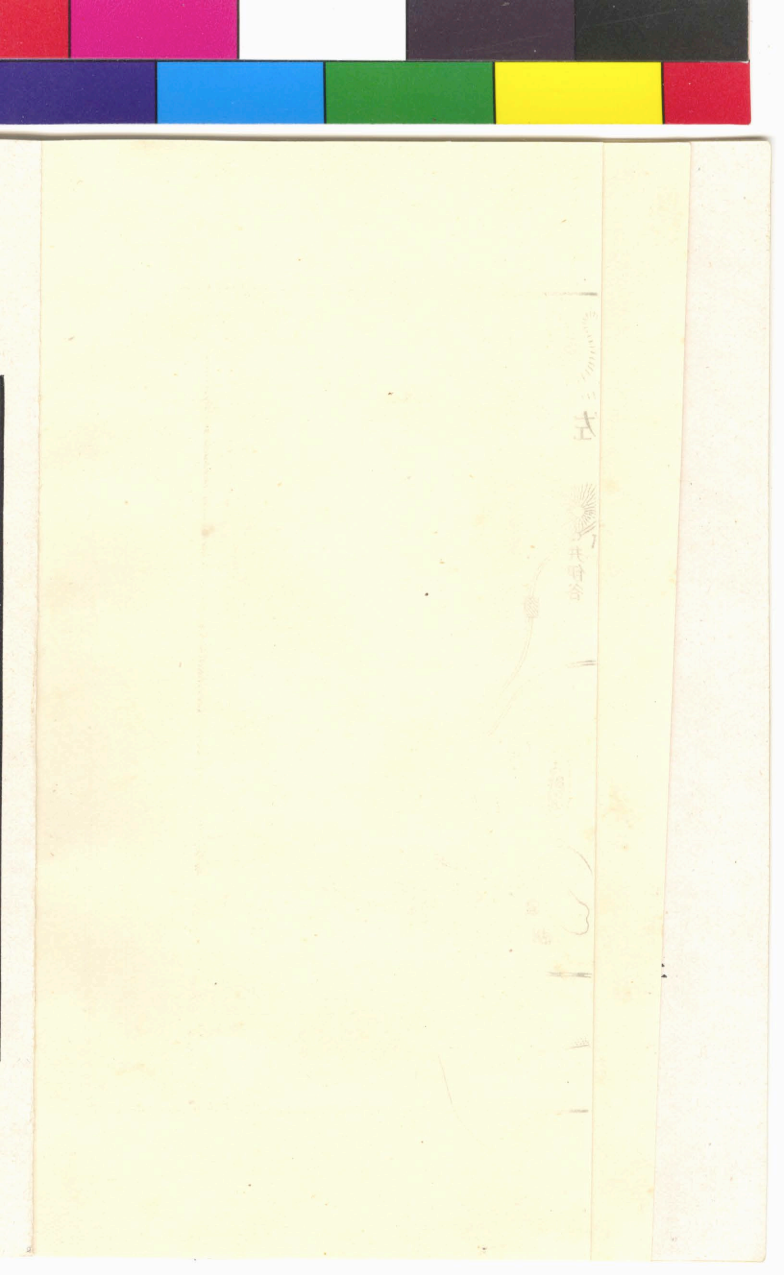
豊橋方面ニ至ル

北至ニ里ノ

井伊谷宮附近略圖（二十万分ノ一）









式

共計合

ツルに花もつく

わくふくはなうひるふく  
とけふふくしうふくふく

車馬院

小のこころをうたふ

子

二月五日

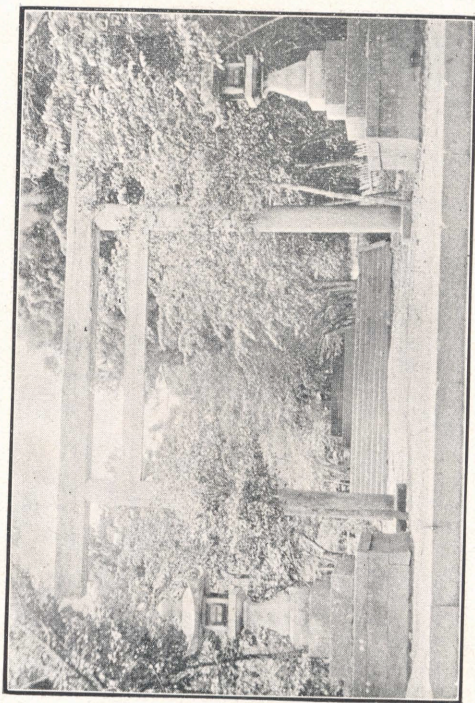
陳虛云

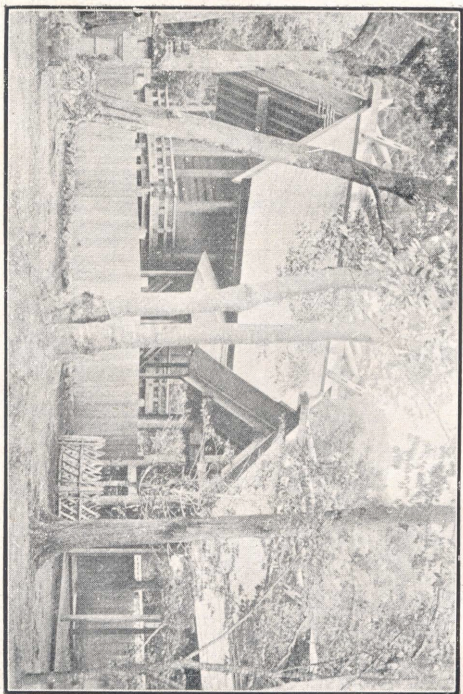
[illegible]

宗良親王御眞筆



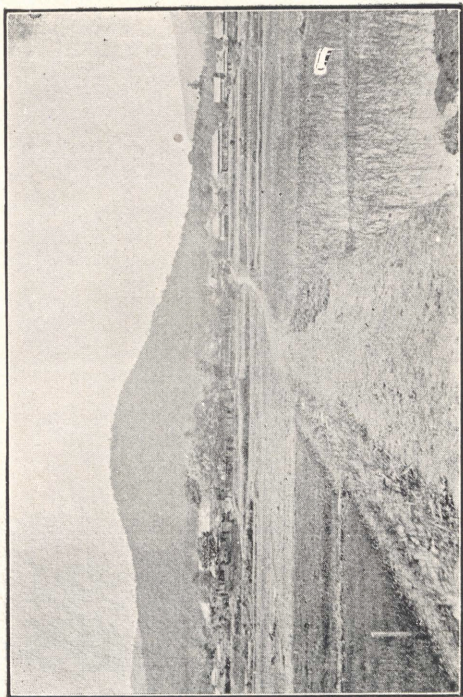
居鳥のー宮谷伊非社中幣官



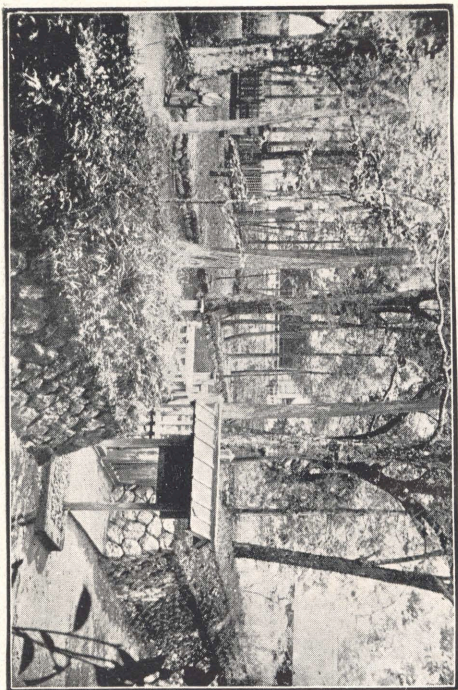


官幣社中伊谷本殿

宗良親王居城伊井趾

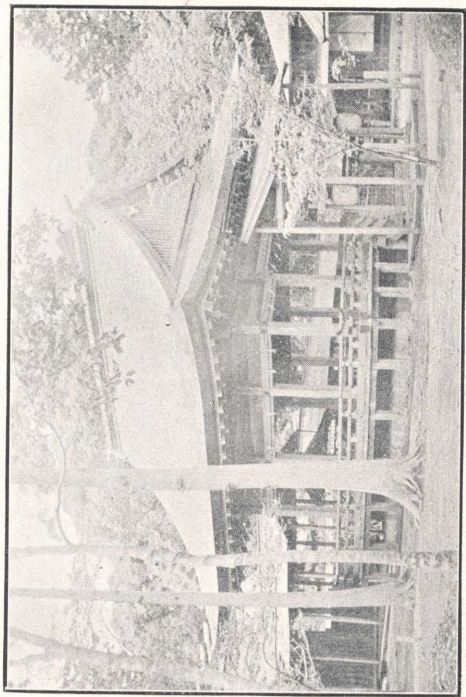






宗良親王御陵墓

官幣中社伊谷宮拜殿



# 官幣中社井伊谷宮畧記

## (一) 鎮座地及沿革例祭

鎮座地 是靜岡縣遠江國引佐郡井伊谷村にあり。濱松市を距ること北方約四里、遠く三方原の古戰場を控へ、近く濱名湖の北岸に臨み、奥山街道に沿ふ。

風物明媚、境内八千五百餘坪あり。古木巨樹鬱葱として壯嚴幽邃、參拜者四時絶ゆる期なし。李花集に曰く、

延元四年の春の頃、遠江の國井伊の城に侍りしに、濱



名の橋霞み渡り、橋本の松原はまの浪かけて、遙々と見渡され、朝夕の景色面白く覺え侍りければ

○夕暮は溼もそこしらすけの

入海かけて霞む松原 宗良親王

沿●革●及●例●祭● 明治二年の御造營にして、同六年六月九日宣

下を以て官幣中社に列せらる。例祭は毎年九月二十二日なり。月次祭は毎月一日、二十二日とす。

(二) 御祭神

御●祭●神● は後醍醐天皇第二の皇子、宗良親王(御母は權大納言藤原爲世の女爲子)

なり。御年十餘歲、尊澄と稱して妙法院に住し、尋て三品に叙せられ、天台の座主となり給ふ。後醍醐天皇北條氏を滅さむとし給ふや、親王御兄尊雲、大塔宮護良親王と共の中興の大議に參畫し、事泄れて天皇は笠置に行幸せられ、(元弘元年八月)親王は尊雲と共に僧兵を糾合し、佐々木時信と辛崎濱に戰ひて之を敗る。然るに幾もなく衆徒離叛せしかば、再舉を圖らんがため笠置に入り、城陷るに及びて囚へられ、遂に讃岐國詫間に流され給ふ。(元弘二年三月)元弘三年、義軍(新田 楠等)北條高時を誅するに及び、天皇隱岐より還

幸、宗良親王も亦兵を率ゐて京に上り給ひ、再び座主となり、建武二年二品に叙せらる。既にして尊氏叛し、延元元年五月、楠正成等湊川に戦死し、尊氏京都を陷るるや、天皇神器を奉じて延暦寺に幸せられ、宗良親王を一品に叙して僧徒を勉勵せしむ。座主の一品に叙せられたるこれを始めとす。同十年、尊氏佯り降りて還幸を請ひ、天皇また權りに之れを聽して京師に還幸し給ひ、諸親王及諸將を諸國に遣して恢復を謀らしむ。親王乃ち井伊道政を從へて遠江國井伊城に入り、義兵を擧げ、後北畠顯家等と



合して奈良に入り、連戦連勝、將に都を攻めんとし、顯家戰  
沒するに及び、勅により再び東國の經略に従ふ事となり、  
伊勢より御船を出さる。延元三年九月十日、海上颶風に  
あひ、親王の船辛うじて遠江國白羽港に著きぬ。

○いかてほすものともしらすとまやかた

かたしく袖の夜の浦浪

やがて井伊城に入り給ふ。翌年八月後醍醐天皇吉野に  
崩じ給ひてより、南風愈競はず。親王歎息の餘

○思ふには猶色淺き紅葉かな

そなたの山はいかに時雨るる

と詠せられ、散り來し紅葉の一片に添へて、別當資次に贈り給ひぬ。後村上天皇位に即かせらるゝや、遺詔を親王及諸將に頒ち、時に及びて進略せしめ給ふ。親王時に井伊城にあり。髪を蓄へて名を宗良と改め、上野親王或は信濃宮と稱し、尋で中務卿征東將軍に任せられ、駿河安部城の陸良親王と相呼應して義徒を聚め給ふ。興國元年二月、賊將高師泰、仁木義長等大舉して來り攻むるに及び、殊死尙保つ能はずして井伊城遂に陷る。既にして親王

餘衆を集め再び井伊城に據りしも、復師泰に敗られて駿  
遠甚だ振はず。親王遂に越後に赴き、北陸の軍を督して  
上杉憲顯を伐ち、敗れて信濃に入り、其後遠參甲美信越の  
間に多年の流離を重ね、具に辛酸を嘗めさせ給ひて、至る  
所に賊兵と戦はせ給ふ。其間、足助重春(參河の參人)、香坂高宗  
(信濃の信濃人)、狩野介貞長(駿河の駿河人)、井伊道政(遠江の遠江人)等、最もよく大義の爲  
に扈從し奉れりといふ。正平七年、尊氏弟直義を殺し、義  
詮詐り天皇の還幸を請ふや、陽に許し給ひ、諸將をして尊  
氏を鎌倉に攻めしむ。親王も亦兵を信濃に起し、征夷大



將軍に任せられて東國の軍事を統帥せらる。顧れば、久しく邊陲に弓馬を事をせられて、今は都の優しき手振も打忘れさせ給へりければ、大將軍の宣旨今更のやうに思されて

○思ひきや手もふれさりし梓弓

おきふし我身なれむものとは

閏二月二十日、親王、新田義宗、義興、義治等と兵を合せ、進みて武藏野に陣す。

○君のため世のため何か惜しからむ

すて、かひある命なりせは

と詠て士卒を勵し給ひ、大に金井の原に戰ふて賊を走らす。其後軍破れて信州諏訪に入り再舉を計り給ひ、神家、滋野、上杉、仁科の族を率ゐて發せんとするに臨み、天皇南に幸せらるゝと聞き、また信濃に歸り給ふ。

正平廿三年、後村上天皇崩せられて長慶天皇即位。南朝微弱にして詔命權威なく、親王の窮蹙滋甚し、上杉、畠山等來り攻むるに及び互に勝敗あり。文中三年冬、信州大河原を發して吉野に詣り給ふ、時に御年六十二。延元年中

東下以來、櫛風沐雨こゝに四十星霜。山河風物依稀とし  
てありし昔に變らねど、紅顔花容空しく謝して、人は昔の  
人ならず。

○同じくは共に見し世の人もかな

戀しさをたに語りあはせむ

天授三年、御子興良親王京都に幽囚せられ、疾革まると聞  
し召れて

○我こそはあらし風をもふせきしに

獨や苔の露はらはまし



○時雨より猶定めなく降るものは

おくるゝ親の涙なりけり

と詠せさせ給ひて御歎き限なし。同年また信濃に行か  
むとせらるゝや、天皇御歌を賜ひて之を慰め給ひければ

○老の浪またたちわかれいな舟の

上れは下る旅のくるしさ

尋て信濃に入り、天授六年義兵を大河原に擧げたれども  
應ずるもの少し。去りて河内に之き、山田の庄に寓す。

弘和元年十二月新葉和歌集を重訂して上らる。後また

遠江に來られ、元中二年八月十日井伊城中に薨じ給ふ。  
御年七十四。

畏くも九重雲近きあたり、竹の園生に生ひ立たせ給へる  
御身ながら、偏に天下を治め蒼生を安からしめんがため、  
五十餘年が間、南船北馬、日として席暖かなる遑なきまで  
王業に勤勞せさせ給ひし御事蹟は、仰ぎまつるだに恐多  
き御事なり。『王事寧將成敗論唯知順逆是忠臣』要はた  
だ大義に徇ふにあり。顧れば南朝の義舉、一度は其終を  
完くせざるに似たるも、遺化流風の薰染するところ、千歳

の下、人をして秋霜烈日の慨あらしむるもの存す。

古今、大義正節に同する少なからず。然れども一度逆境に立つ時は、翻然として利に走り、以て身の苟安を計る者多し。十年節を曲げざるは稀なり、況んや五十年をや、更に況んや、世の雨風に慣れ給はざる、雲上のやんごとなき御身をや。劔をとりては、破邪顯正の道を傳へ、物のあはれに觸れては、錦繡の懷おもひを叙べ玉ふ。文武兼備はれる我宗良親王の如きは稀なりと仰ぎ奉る。君それ若し一たび、親王の家集、李花集を繙き奉らば、當時の狀況蓋思半に過ぐ



るものあらんか。

(三) 境内及附近舊蹟

宗・良・親・王・御・陵・墓。當社本殿の背後にあり。六百餘坪、石垣

を以て圍み、南に門あり。中央に碑あり、玉垣を回らす。

碑の表に冷湛寺殿と刻す。

井・伊・神・社。當社の攝社にして本殿の南にあり。井伊道政

及其子高顯を祭る。共に宗良親王及其御子尹良親王に

事へて功ありし者。尹良親王は道政の女駿河姫の生む

處なり。

井伊氏は遠祖共保(一條天皇の頃)より世々此地の庄園

たりし者にして子孫今猶繁榮す。

井伊城趾。當社を距る東北四丁許にして形狀富士山に似たり。世々井伊氏の居城にして、宗良親王こゝに據り大義を樹つ。今尙城郭の迹をみるべし。

龍潭寺。昔は冷湛寺と稱し、世々井伊氏の廟あり。宗良親

王薨去の時、親王の御弟無文禪師こゝにて葬儀を營み、寺

後の林中に葬る。

(今の御陵墓地)

左甚五郎の鶯張を以て名あり。

山門前に井伊氏の祖共保出生の井あり、玉垣を回らす。

奥山城趾。當社を距る西北方約一里にあり。井伊氏の族

奥山次郎の居城なり。子孫世々住す。延元元年宗良親王此城に據り、應安四年親王の御弟無文禪師茲に入る。方廣寺は禪師の開山にして、同寺の境内に御陵墓あり。

(終)



明治四十四年七月十二日  
明治四十四年七月十五日

《定價金拾錢》

著者

林治一

編輯者兼

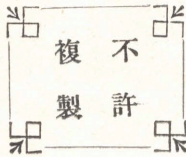
中井眞幸

印刷者

上田鑑二

發行所

官幣中社井伊谷  
宮社務所



東京市麴町區飯田町  
二丁目六十八番地

靜岡縣引佐郡井伊谷村  
字井伊谷

靜岡縣引佐郡井伊谷村

